


医学概論（キャリアパス）講義

「医師のキャリアデザインを考える」

医学科 3 年生対象

平成 27 年 6 月 23 日（火）開催



奈良県立医科大学 女性研究者支援センター まほろば



目 次

1. 開催概要	2
2. プログラム	2
3. 大ホール配置図	3
4. 講演の様子	4
5. グループワーク説明資料	5
6. グループワークの結果	6
テーマⅠ「自分が目指す医師像」	6
テーマⅡ「理想の医師・研究者像」	6
テーマⅢ「理想に近づくために現在取り組んでいること」	9
テーマⅣ「理想の実現にあたっての不安や心配事」	10
テーマⅤ「理想の医師に近づくため、ある一定期間研究に従事することは重要だと思 うか」	12
7. 学生アンケートの結果	16
8. まとめ	19

開催概要

名 称：医学概論（キャリアパス）講義「医師のキャリアデザインを考える」

日 時：平成 27 年 6 月 23 日（火）13：10～16：30

場 所：巖櫃会館 3 階 大ホール

参加者：奈良県立医科大学

医学科 3 年生 114 名（男子 89 名、女子 25 名）

奈良県立医科大学

前理事長・学長 名誉教授 吉岡 章

一般社団法人 奈良県医師会

理事 原 健二

医療法人 幸風会 くずもとファミリークリニック

院長 葛本 幸康

女性研究者支援センター

センター長 車谷 典男

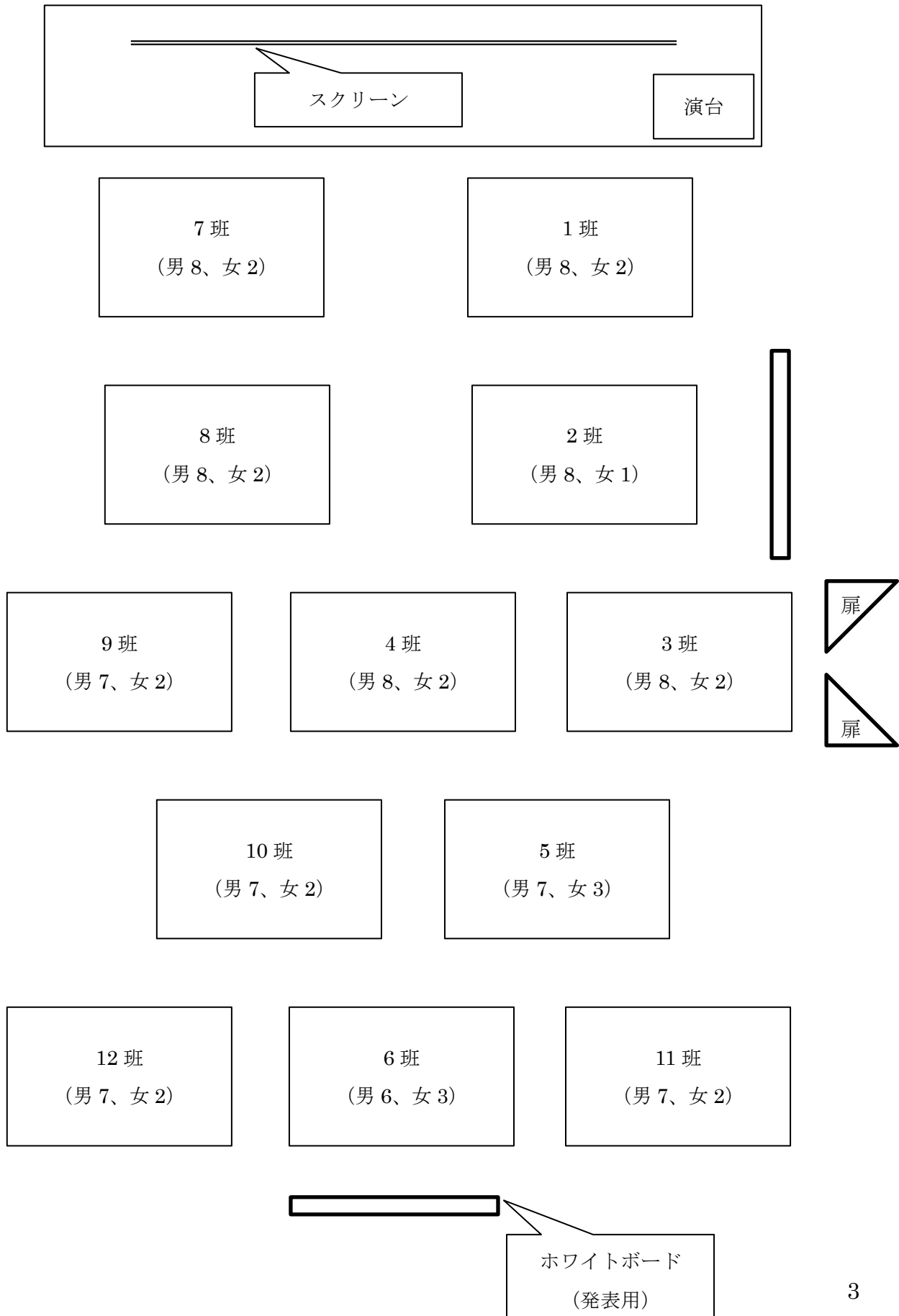
マネージャー 須崎 康恵

コーディネーター 水野 文子、吉田 昭三、岡本 希

プログラム

- 13：10～14：00 講演
『私のキャリアパス“診療、研究、教育そして管理・運営は一体である”』
奈良県立医科大学 前理事長・学長 名誉教授 吉岡 章
- 14：00～14：05 ワークショップ内容説明
- 14：05～15：00 グループワーク前半（25分＋発表 30分）
テーマⅠ『自分が目指す医師像』、Ⅱ『理想の医師・研究者像』
Ⅲ『理想に近づくために現在取り組んでいること』
Ⅳ『理想の実現にあたっての不安や心配事』
- 15：00～15：15 レクチャー
『現在の仕事に研究が果たした役割について』
一般社団法人奈良県医師会 理事 原 健二
医療法人幸風会 くずもとファミリークリニック 院長 葛本 幸康
- 15：15～15：55 グループワーク後半（10分＋発表 30分）
テーマⅤ『理想の医師に近づくため、ある一定期間研究に従事することは重要だと思うか』
- 15：55～16：30 講評・個人レポートの配布

大ホール配置図



講演の様子



〈学生の感想〉

・将来の可能性を狭めてしまうことに対する危惧、そして自分自身に対する過小評価はやめるべきだというお話が印象に残りました。医師になり専門が定まってもまだまだできること、挑戦できることが残されていることに希望が持てました。

・何かになりたいと思ったことを強く心にとめてそれに向かって全力で努力し、そして達成してきた先生の生き方に感動しました。

・吉岡先生の講演を聞き、医師として従事できる仕事の多様性を実感することができました。医師としてのキャリアパスでは、臨床医から歩み始めても途中で研究を行ったり、留学したり、大学教育に携わったりと様々な視点から医学に関係した仕事を行えるのだと知りました。私もまだ将来像は明確にわかりませんが、経験豊かな医師になれたらいいと思いました。

・医学部に入り、様々な目標をその時々たてることが重要だと感じさせられる講演でした。明確な目標をたて、それを実現するためにまい進する。それが成功の秘訣だと思いました。

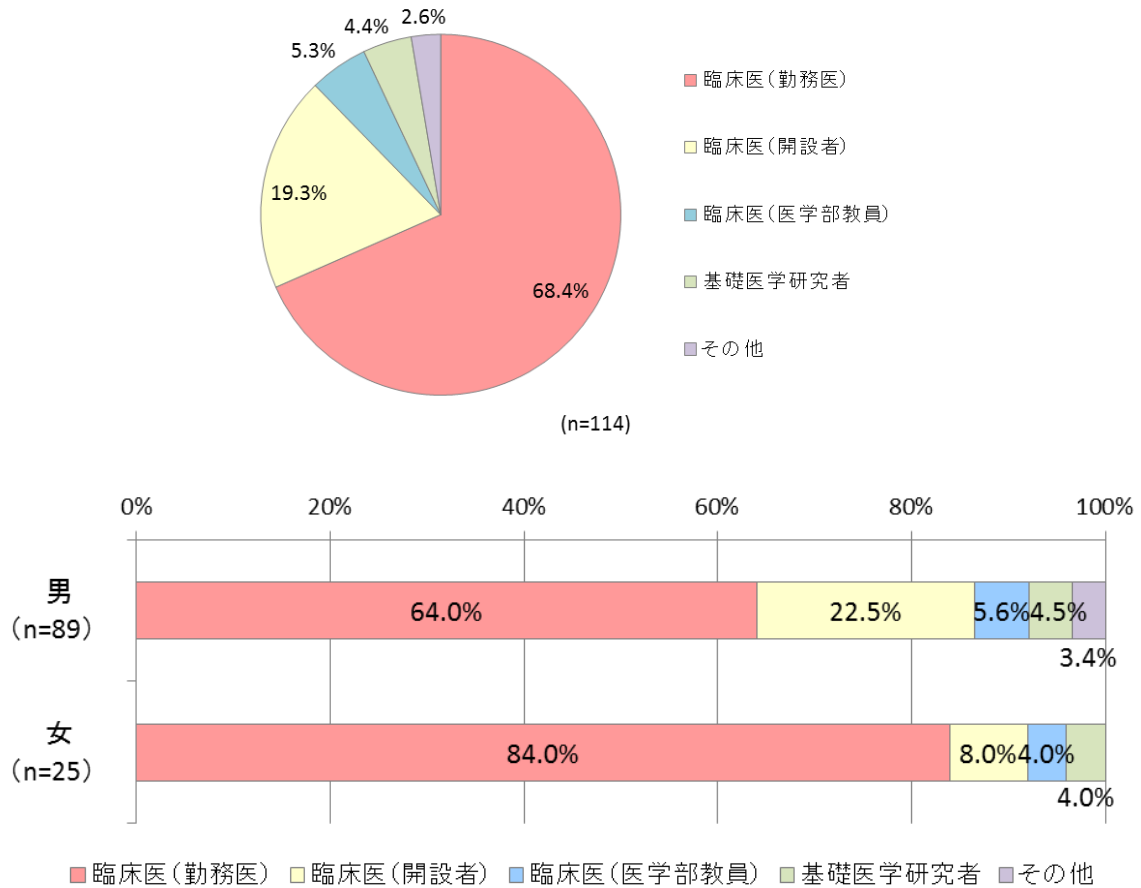
・入学後にも、今回と同じようなお話をしてくださったが、今回は3年生の私達へ向けたメッセージのようなものを感じた。また、入学当時に感じたことを思い返す良い機会にもなった。出来事やそこで感じたこと、そして自分の歩む道への決意を聞くことができ、その生の声に、私自身の現状を見つめ直し将来について思いをめぐらせた。

・吉岡先生のように常に目的意識と好奇心を持ち続けて、生涯学び続けようと思いました。将来どのような道に進むかはわからないので、学生の間は視野を広く持ち、様々なことに挑戦することが大切だと思いました。

・「自分がやりたいこと」を決めたら飽くまでやってみるという先生の姿勢が印象的でした。

グループワークの結果

テーマ I 「自分が目指す医師像」



テーマ II 「理想の医師・研究者像」

〈主なコメント〉

①臨床医 1) 病院や診療所の勤務医

・全人的医療に取り組む医師

患者さんの気持ちに寄り添う医師、患者さん主体の診療を行う医師、患者さんの目線に立って考える医師、患者さんのニーズに柔軟に対応できる医師、子供の成長を見守り続ける小児科や小児外科医

・良好なコミュニケーションをとれる医師

患者さんやその家族と十分なコミュニケーションをとれる医師、他の医療従事者と良好な関係を保てる医師、チーム医療ができる医師

・地域に密着した地域医療に従事する医師

・高度な技術と豊富な知識、経験を持つ医師

たくさんの経験を積んで正しい診断と治療ができる医師、外来・救急・往診どれもを遂行できる医師、学び続ける医師、信頼される医師、最適な医療を最適な方法で行う医師、全身の診断ができる医師、重篤な疾患を治せる医師、人の命を救える医師・救命医、腕のよい外科医、世界で活躍する脳外科医、海外で働ける専門性を持つ医師、他の臨床医や研究医から相談を受ける専門医

・研究に関与する臨床医

診療と研究を両立する医師、最先端の研究を常に臨床に応用できる医師、留学経験のある医師

・収入の高い医師

高額な報酬を得る病理医か麻酔科医師、高収入を得られる大病院の勤務医

・後輩医師の育成に取り組む医師

・メディアに取り上げられテレビ取材を受けるような有名な医師

・ワークライフバランスのとれた（9時から17時勤務）病理医

・大都市で働く整形外科医、循環器専門医

①臨床医 2) 病院や診療所の開設者

・地域に密着した地域医療に従事する医師

地元住民や医療従事者に信頼される開業医、地域連携ができる医師、地域の高齢者医療に貢献する医師、1日100人の患者さんを診れる医師

・患者さんとの距離が近い開業医

患者さんの話を傾聴できる医師、患者さんの目線で考えられる医師、患者さんのニーズに応えられる医師

・経営ができる医師

安定した経営を行える医師、高い利益を生む経営者として能力の高い医師、名誉ある地位を築ける医師、高収入を得る医師

・知識と経験が豊富な医師

- ・ワークライフバランスが上手にとれる医師
- ・自身の健康を維持できる医師
- ・内科医、アレルギー専門医

①臨床医 3) 医学部教員

- ・学生のレベルに合わせた理解しやすい授業を行う教員
- ・学生の興味をひく授業ができる教員
- ・学生の意欲を高める講義ができる教員
- ・海外で活躍する学生を育成できる教員
- ・診療を行いながら学生の育成を行う臨床教員
- ・医学部教授

②基礎医学研究者

- ・臨床と基礎を横断的に研究できる研究者
- ・新規治療薬の開発に携われるような研究者
- ・新しい発見に携わる研究者
- ・インフルエンザ等感染症の専門研究者

③その他

- ・医療訴訟問題（賠償科学）に携わる
- ・医工連携を進める
- ・産業医や公衆衛生医



テーマ III 「理想に近づくために現在取り組んでいること」

〈主なコメント〉

1) 学習

- ・授業で学ぶ、進級や卒業できるように大学の講義内容について勉強する
- ・病院実習で現場から学ぶ、在宅医療や介護の実態を現場で学ぶ
- ・医学の勉強をして医学知識を身につける
- ・医学論文や医学雑誌を読む
- ・基礎医学の教室でカンファレンスや研究に参加する
- ・英語の勉強、USMLE の勉強会に参加し語学力を磨く
- ・医療行為と他分野の関係性についての勉強
- ・読書、医学以外の教養を深める勉強や経験
- ・様々な社会問題に興味を持つ
- ・塾のアルバイトで人に教えるスキルを高める
- ・経営の勉強
- ・リーダーシップを学ぶ
- ・議論やプレゼンテーションを行う場に参加しスキルを磨く

2) 交流

- ・他大学の学生との交流、学外ワークショップの参加、サークル活動
- ・国際医学生連盟での活動
- ・他職種連携の勉強会の開催
- ・部活の先輩や後輩との交流
- ・アルバイトで多様な立場の人と関係性を築く
- ・病院実習や他の病院で働くさまざまな年齢の医療関係者との交流
- ・趣味の世界で会う医療関係者以外の人との交流
- ・子供と関わる機会を持つ
- ・友達との交流

3) 体力づくり

- ・部活での運動で体力と忍耐力を身につける
- ・部活以外での運動

4) ボランティア活動

- ・地域でのボランティア活動

テーマⅣ「理想の実現にあたっての不安や心配事」

〈主なコメント〉

1) 能力面の不安

- ・勉強不足、知識不足
- ・進級や留年に関する不安、国家試験の不安
- ・コミュニケーション能力の不足
- ・要領が悪いことに関する不安
- ・手先が不器用であることに関する不安
- ・全体的な能力不足、中途半端になることへの恐れ
- ・英語力の不足、英語論文が早く読めない
- ・経営知識の不足

2) 精神面の不安

- ・集中力が持続するのか
- ・精神面で耐えられるのか
- ・モチベーションの維持

3) 体力面の不安

- ・激務の中での体調管理
- ・体力不足

4) 現状に対する不安や心配事

- ・何を勉強すれば、経験すれば将来役立つのか具体的にわからない
- ・大学で学ぶことと医療現場とのギャップ
- ・現在学んでいることが実際に役立つのか
- ・学生時代の勉強以外での有意義な時間の過ごし方
- ・大学が閉鎖的であること

5) 将来のキャリアに関する不安や心配事

- ・自分は本当に医師になりたいのか
- ・自分の将来や仕事が具体的にイメージできない

- ・卒業後の進路やキャリアに関する情報不足
- ・卒後どれくらいで医師として一人前になるのか
- ・ロールモデルの不在
- ・医局入局の必要性
- ・奈良県外での就職先
- ・開業場所や開業資金の不安

6) 将来の生活に関する不安

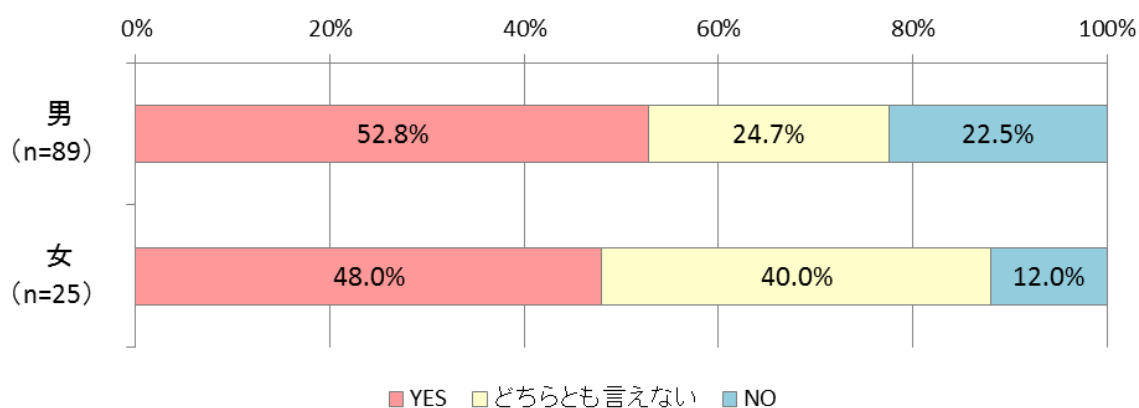
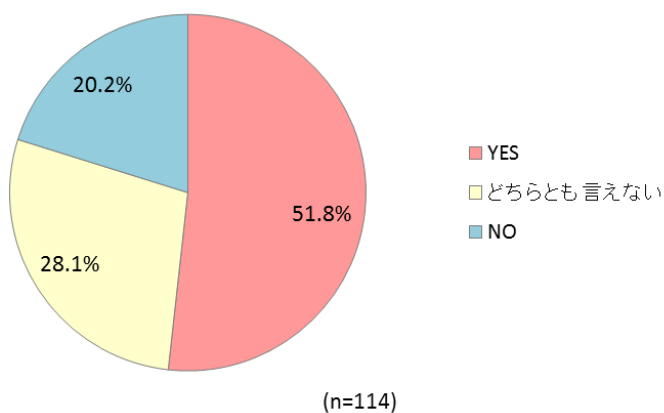
- ・研究者になった場合、生計が成り立つのか
- ・収入に関する不安、奨学金の返済
- ・余裕のある生活ができるのか
- ・ワークライフバランス
- ・結婚
- ・仕事と子育てや家庭との両立

7) その他

- ・将来的な医師という職業のニーズ
- ・専門医制度の変更
- ・少子高齢化社会



テーマ V 「理想の医師に近づくため、ある一定期間研究に従事することは重要だと思うか」



〈主なコメント〉

1) Yes

よき臨床医として

- ・研究に従事する経験は、臨床医としての能力や専門性の向上につながる
- ・臨床医にも研究マインドが必要
- ・治療法が確立されていない疾患についての理解を深め、よりの確な治療を提供できる
- ・臨床医としての探究心を発揮できる
- ・臨床現場にあるデータや知識から着想を得て研究を行えるのは、臨床医ならではのあり、臨床医の強みを活かせる
- ・医療行為のマナー化を防ぐ

よき研究医として

- ・研究がしたい
- ・研究医が自分にとっての理想の医師である

- ・より多くの人を助けることができる治療法開発の可能性を秘めている
- ・医学は発展途上の学問であり研究が必要である

よき医療人として

- ・客観的かつ科学的な判断能力の向上に役立つ
- ・幅広い視野の獲得に役立つ
- ・創造性の習得に重要
- ・厳しい競争社会に身を置くことによる自己改革と自己研鑽に役立つ
- ・研究を通じて自分の得手不得手を再確認する
- ・研究は医師の責務である
- ・医学は science であり、医師は scientist である
- ・臨床と研究を両方行うことで相乗効果が得られる
- ・長い医師としてのキャリアの中で、研究に従事することはモチベーションを保ち職業人生を豊かにする。

その他

- ・自分の可能性を広げる
- ・研究者の立場を理解し、研究を通じて人脈を広げられる
- ・有名人になれる可能性がある
- ・研究期間を利用して子育てをする

2) どちらとも言えない

不安

- ・研究期間中の生活とくに金銭面の不安
- ・時間外賃金のない長時間労働に対する不安
- ・研究成果がでないかもしれないという不安
- ・興味を持てるテーマと出会えないかもしれないという不安
- ・自分に研究者としての適性があるかどうか分からない
- ・臨床と研究のどちらが自分に合っているかわからない
- ・臨床と研究の両方を行い、両方とも中途半端な医師になる可能性がある

臨床医が研究を行うことに対する疑問

- ・研究の内容や結果が、臨床現場に直接反映されなければ重要とは思えない

- ・学位取得や出世のために無理に研究に従事しても研究マインドの醸成にはつながらない
- ・一定期間の研究経験が臨床医の成長に役立つのか想像しにくい
- ・臨床医が研究に時間を費やすことのメリットとデメリットがわからない
- ・研究結果や論文の理解、解釈、分析は、臨床医が自ら研究しなくても身につくのではない
- ・理想の臨床医と研究がリンクしているとは思わない
- ・研究に従事した人の中にもしなかった人の中にも素晴らしい臨床医はいる
- ・国や大学にとって臨床医が研究を行うことの金銭的なメリットはあるのか

その他

- ・研究はしたい人がすればよい、しない人はしなくてよいのでは
- ・研究に対してのイメージがわからない
- ・必要と思うが意欲がわからない
- ・臨床現場に立った後で、必要と思うかどうかによる

3) No

よき臨床医として

- ・臨床医として目の前の患者さんを一人でも多く助けたい
- ・常に臨床現場で働きたい
- ・臨床医の能力は臨床の現場でのみ向上する
- ・臨床医としての能力や専門性の向上のために時間を使いたい
- ・高度な専門知識や技術を持つ高度技能専門医をめざすなら、他人の研究結果を取り入れ自らは技術向上に取り組むべきである
- ・臨床医にとって研究に費やす時間は、臨床経験や技術習得の時間を短くするので無駄である
- ・臨床と研究両方に従事することで、両方とも中途半端になるおそれがある

臨床医が研究を行うことに対する疑問

- ・研究の経験が臨床に活かせるのか不明
- ・最先端の研究に関する情報を収集し理解することは重要だが、臨床医が自ら研究する必要性は感じない
- ・全ての臨床医が研究に従事できる予算も施設もそもそもない
- ・研究成果がでないリスクを考えると、臨床医は臨床に専念した方が効率的

- ・意味のない研究に時間を割くべきではない

臨床医が研究を行うことの不利益

- ・収入の低下
- ・過重労働
- ・妊娠や出産の機会を逃してしまう可能性
- ・研究結果を残すプレッシャー

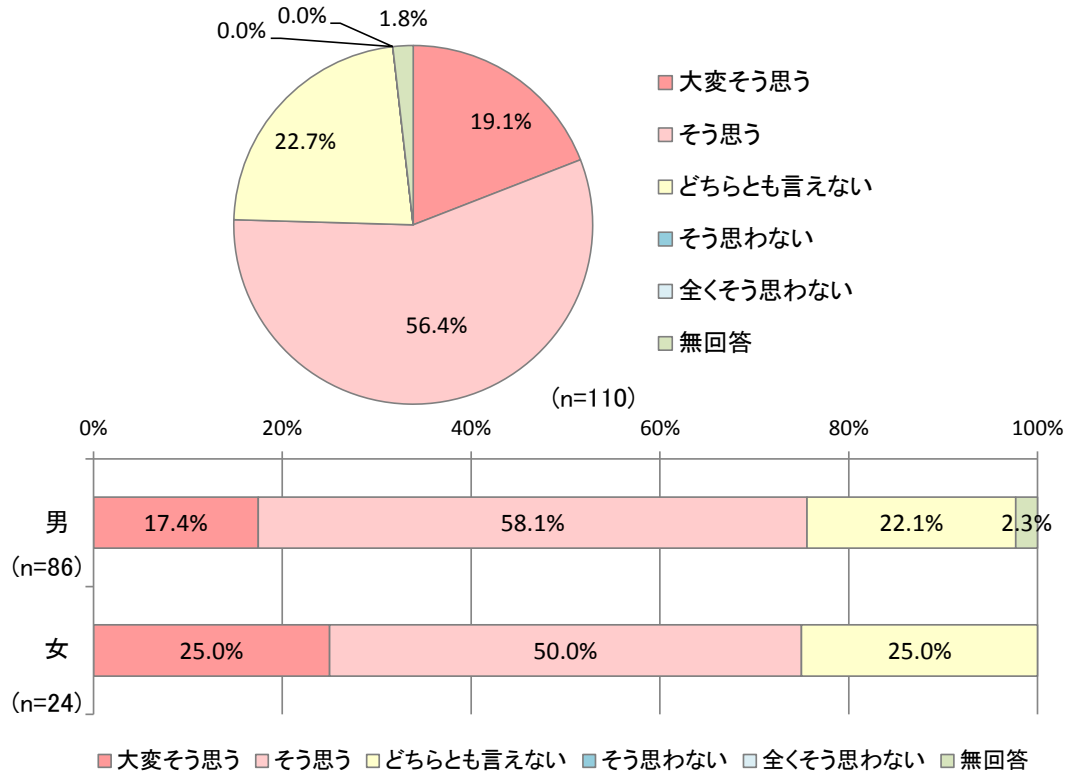
その他

- ・研究を続けるモチベーションを保つことができないと思えない
- ・自分には研究は不向きと思う
- ・どのタイミングで研究をすればいいのか難しい
- ・出産や子育てのある女性にとって、臨床に加えて研究をする価値はあるのか

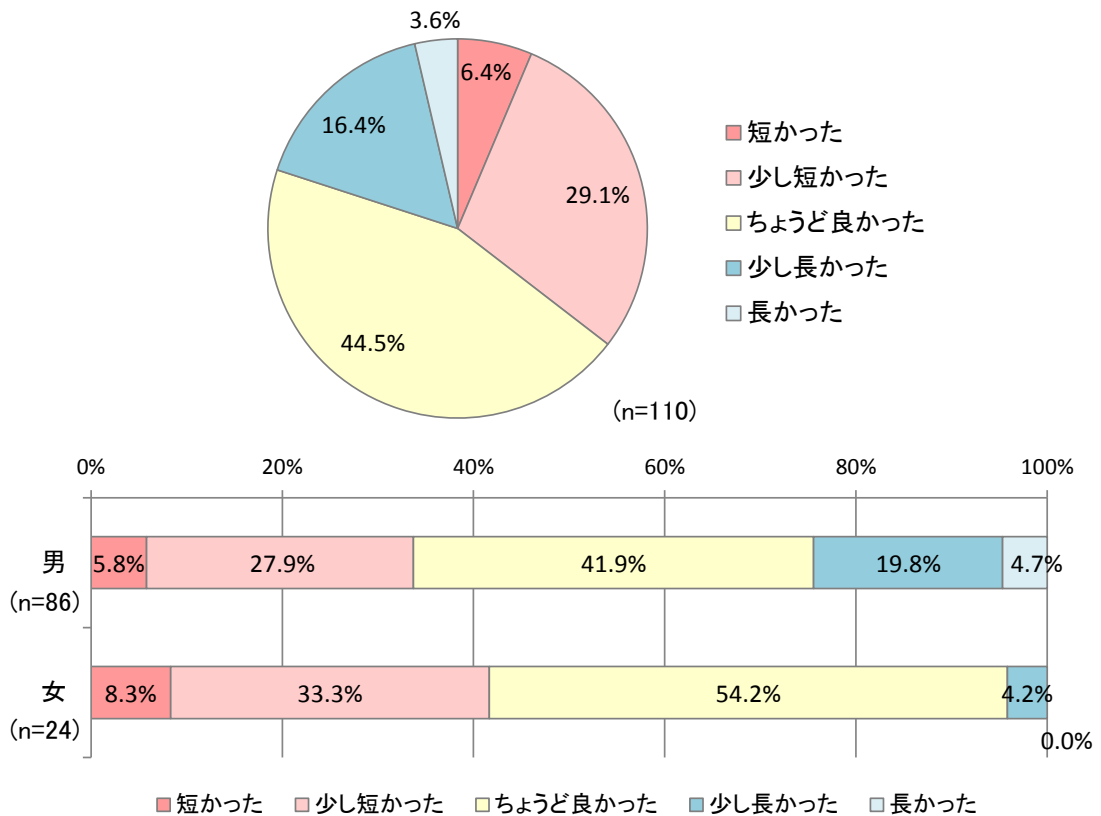


学生アンケートの結果

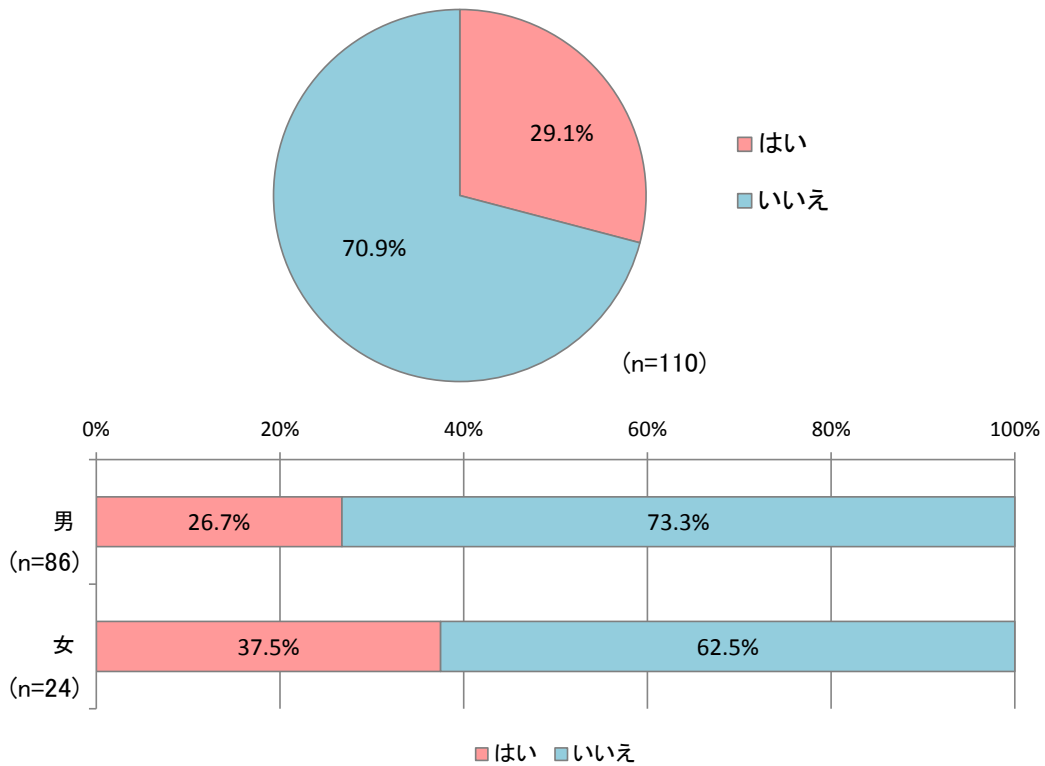
Q. ワークショップにおいて、あなたは積極的にグループ討議に参加できたと思いますか



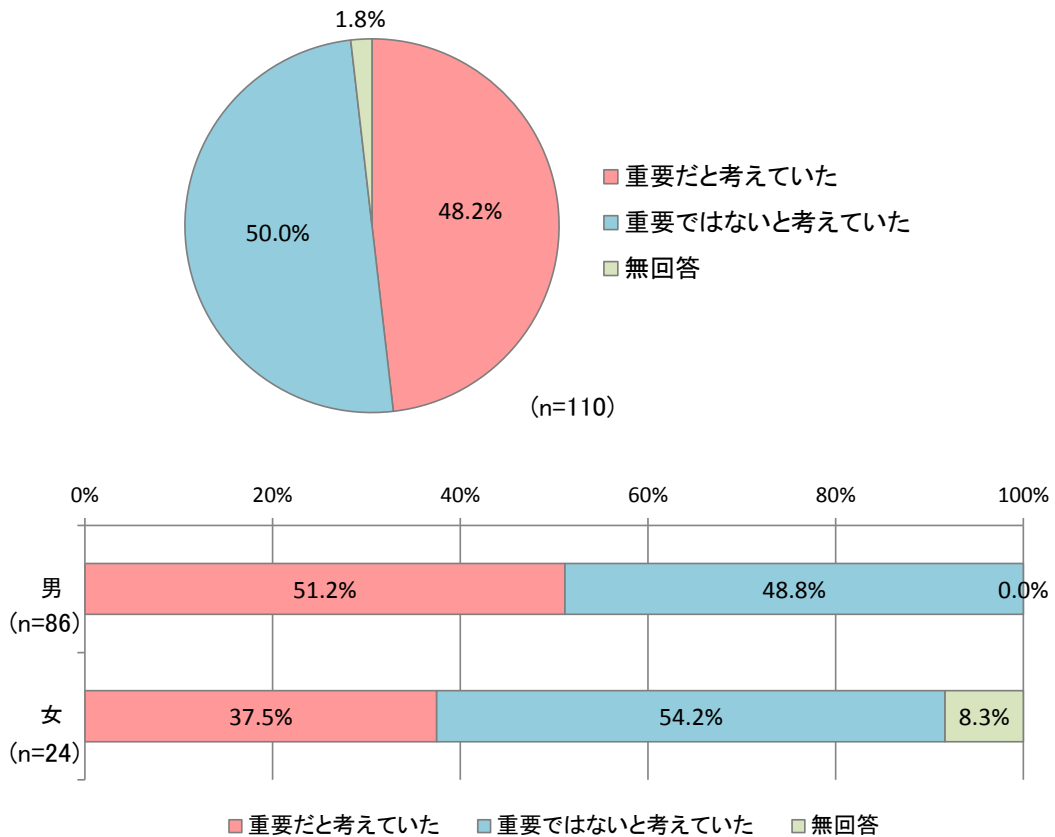
Q. グループワークの時間配分は適切でしたか



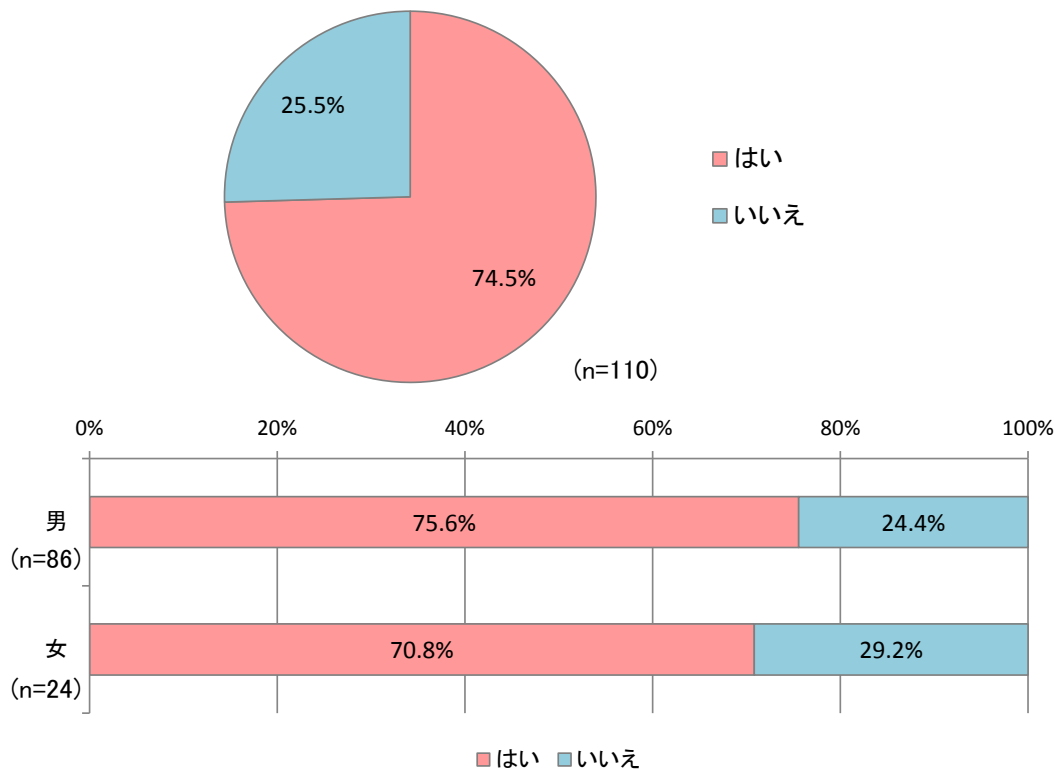
Q. 今回の講義を受け、自身のキャリアデザインに対する考え方は変わりましたか



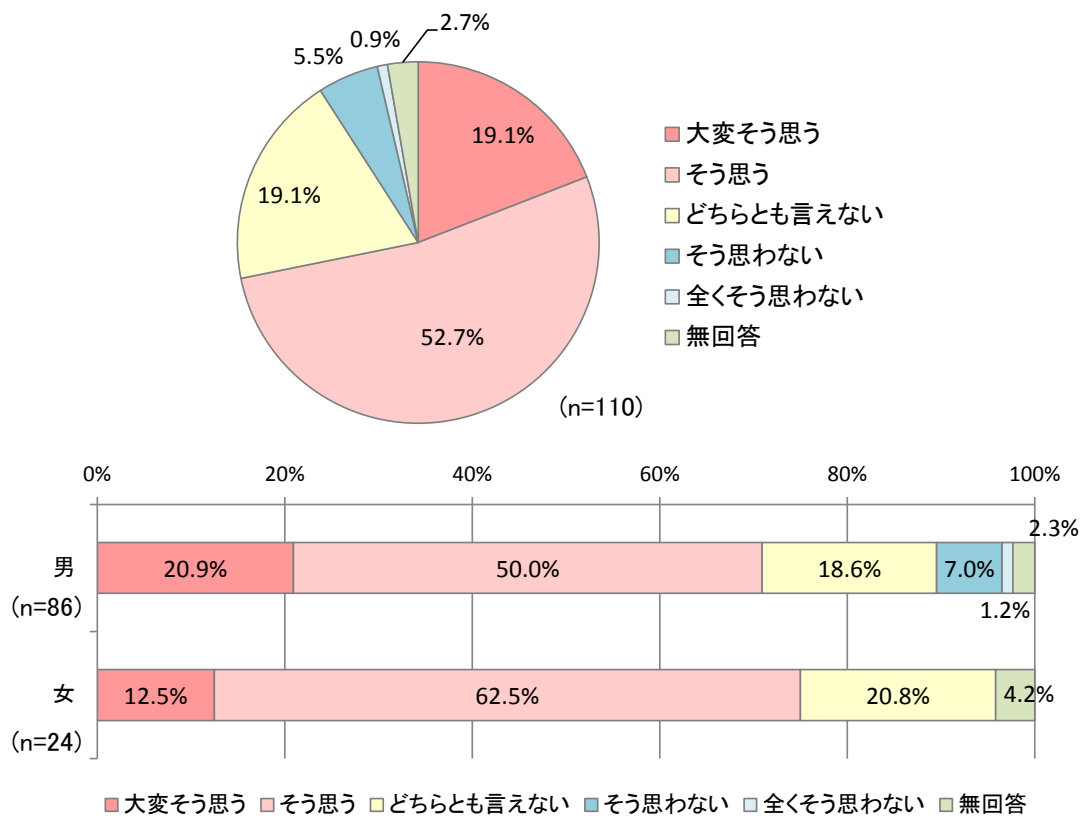
Q. 今回の講義を受ける前は、研究について従事することについて、どのように考えていましたか



Q. 今回の講義を受け、研究に従事することは将来自分にとって必要となりそうなので重要だと思うようになりましたか



Q. 今回の講義は自分の将来を考えるのに役立ったと思いますか



まとめ

吉岡章前学長の講演は、学生時代から将来を見据えて学ぶこと、目の前の課題や仕事に取り組む中で次のキャリアパスや夢が見えてくること、限界を自分でつくりださないこと、喜びとやりがいを持って生涯学び続けることを学生に伝える内容であった。ご自身の経験に基づいた講演は、学生はもとより私たち教員やセンタースタッフ一同も深い感銘を受け、講義後のレポートからも吉岡先生のメッセージが多くの学生に的確に伝わったことが読み取れる。

ワークショップでは、自分のめざす将来像を学生自身が考え、医師のキャリアパスの中で研究期間がはたす役割や意義について教員や外部講師とともに考える機会を持った。講義終了後のアンケート結果から、研究に従事することは将来重要だと考えていた学生が、講義前には48.2%であったのに対し、講義後には74.5%と上昇しており、研究に従事することの意義を学生に伝える授業の重要性を再確認した。

多くの学生がめざす将来像は臨床医であることから、臨床医のキャリアパスや研究活動を紹介し、臨床医が研究に従事する意義を具体的に示す授業が今後も必要と考える。また、研究活動を身近なものと感じられない学生も多いため、研究のおもしろさを紹介し、研究に参加している同世代の学生との対話を設ける等授業の工夫も大切である。終了後のアンケートでは、学生の71.8%が、今回の講義を自分の将来を考える上で役立ったと回答しており、多様な視点に基づいたキャリアパスを考える講義を継続する必要性を感じた。

末尾になりましたが、今回の授業開催にあたり、準備段階から実施に至るまで、様々なご支援を頂きました諸先生方およびセンタースタッフの皆様にご心より感謝を申し上げます。

奈良県立医科大学 女性研究者支援センター
講師・マネージャー 須崎 康恵